

鉄道総研の

技 術

遺 産

File No. 17

震災復興橋梁写真と 田中豊

■ 帝都復興院の創設と鉄道省の出向者

1923(大正12)年に発生した関東大震災は、首都圏に甚大な被害を与えました。政府では、震災復興を行う機関としてただちに帝都復興院を創設し、総裁に後藤新平(本誌2012年9月号参照)を起用して、震災復興に全力をそそぐこととなりました。帝都復興院は、のちに内務省が管轄して復興局となりますが、鉄道施設の復旧は鉄道省が自ら担当したため、道路をはじめとする都市インフラ全般の復興・整備にあたる組織として機能しました。

帝都復興院は、後藤新平の意向もあって鉄道省の出向者が主要ポストを占め、経理局長に十河信二、土木局長に太田圓三、道路課長に平山復二郎、橋梁課長に田中豊、隅田川出張所長に釘宮磐が就任し、復興事業を本格的に推進する体制を整えました。中でも太田圓三と田中豊(本誌2012年12月号参照)は、市内の道路橋のほとんどを架け替える事業に取り組み、いわゆる震災復興橋梁と総称される一群の道路橋を完成させました。震災復興橋梁は、



①帝都復興事業で完成した隅田川の清洲橋



②鉄道総研で保存されている隅田川六大橋の工事アルバム

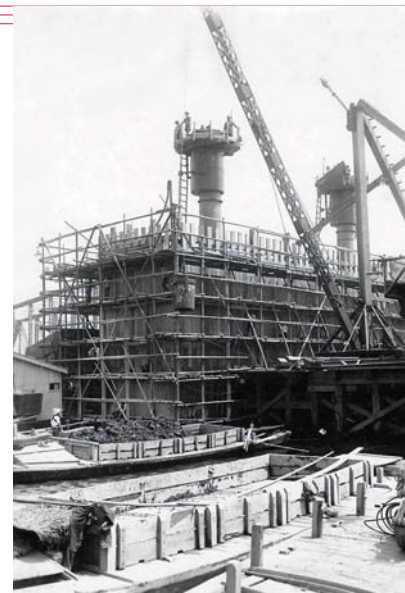


④東京大学で保存されている震災復興橋梁の工事アルバム

海外の最新の橋梁技術を取り入れながら、様々なタイプの橋梁を実現して、日本の橋梁技術の発達に大きな影響を及ぼし、その多くは帝都復興事業の象徴として、今も当時の姿のまま東京の重要なインフラとして機能しています。

■ 隅田川六大橋と田中豊

震災復興橋梁の中でも、隅田川に架けられた6橋は、隅田川六大橋として知られ、1926(大正15)年~1928(昭和3)年にかけて完成しました。上流方から、言問橋、駒形橋、蔵前橋、清洲橋、永代橋、相生橋の6橋で、従来の大規模な橋梁で多用されたトラス橋を敢えて選択せず、それぞれ異なるデザインで完成し、隅田川に新たな都市景観をもたらしました。



③永代橋の基礎工事で採用された潜函工法 所蔵：鉄道総研

鉄道総研で所蔵しているのは、この六大橋の下部構造の工事写真集で、全10冊のアルバムで構成され、写真枚数は約1000枚に及びます。橋梁ごとにアルバムに整理され、大半の写真には、簡単なキャプションと撮影年月日が記されているため、一連の写真によって、具体的な工事の工程を把握することが可能です。ちなみに鉄道総研の所蔵する写真は、1924(大正13)年~1925(大正14)年にかけて撮影されたもので、写真はキャビネ判を基本としてモノクロプリントされていますが、正確な焦点や露出、撮影意図を考慮した構図などから考えて、おそらく専属のカメラマンを雇って撮影した公的な記録と考えられます。

■ 東京大学と鉄道総研の所蔵写真

鉄道総研で所蔵している六大橋の工事記録写真が、どのような経緯で継承されているのかは定かではありませんが、下部構造(橋脚・橋台などの橋梁の基礎部分)の写真のみで、上部構造は含まれていません。



⑤永代橋の渡り初め(1926(大正15)年12月22日)
所蔵：東京大学

実は、六大橋の上部構造を含む震災復興橋梁群の写真は、東京大学工学部社会基盤学専攻図書室に所蔵されており、アルバムの番号や記載事項などから推察して、元は一連の資料であったと判断されます。東京大学の所蔵写真は、六大橋のほかに『世界橋梁絵葉書集』『世界橋梁写真』などからなり、復興局が世界中の代表的な橋梁に関する情報を収集し、復興事業の記録を残すために整理した資料であることが理解されます。

それでは、なぜ鉄道総研に、六大橋の下部構造の写真のみが残されたのでしょうか？以下は、大胆な仮説になりますが、おそらく田中豊が鉄道大臣官房研究所第四科長から東京帝国大学工学部教授に転じた際に、帝都復興院時代の成果として写真、図面などの資料一式を東京帝国大学に移管したと推察

されます。もし、内務省が所蔵していた資料であれば、下部構造も含めて全て内務省(のちの建設省)の承継組織が引き継ぐはずなので、下部構造の写真のみを鉄道総研が承継する理由が見あたりません。したがって、双方の組織に関与し、さらに東京帝国大学へ転じた田中豊が、これらの資料を一括して管理していたと推察されます。

移管にあたって、あまり見栄えのしない下部構造の写真を鉄道大臣官房研究所に置いて行ったのか、自身の専門分野ではない下部構造の写真は不要と考えたのか、下部構造の写真は鉄道橋の参考資料としても役立つと判断したのか、今となっては定かではありません。ちなみに、鉄道総研の所蔵する写真は、



⑥現在の清洲橋(国指定重要文化財)



⑦現在の永代橋(国指定重要文化財)

鉄道総研のルーツである鉄道大臣官房研究所からさらに施設局特殊設計課、構造物設計事務所を経由して、鉄道総研へと継承されました。いずれにしても一連の記録写真が東京大学と鉄道総研でそれぞれ分割して継承されていることは事実で、先人たちが帝都復興事業に果たした業績を示す第一級の歴史資料となっています。

(小野田滋/情報管理部 担当部長)

文献

- 1) 帝都復興事業誌・土木編(上)、復興事務局、1931
- 2) 中井祐：近代日本の橋梁デザイン思想、東京大学出版会、2005